

## 宜野湾高校の生徒達へ（73）

2021.1.19

首里城が焼失して、1年あまりが過ぎようとしている。首里城の再建に関して、さまざまな提案が出されている。今回は、**屋嘉宗彦氏**(法政大学沖縄文化研究所元所長)の提案を取り上げる(沖縄タイムス:10.28.一部引用)。

首里城が火災で崩壊したことは、そのありあさまがテレビで中継されたこともあって、多くの人に**ショッキング**な出来事として受け止められた。その後のインタビュー等では、「**沖縄のシンボルが失われた**」というようなコメントが多かった。苦勞して築いたものが焼け落ちる様をみて、心の痛みを感じないものはいない。首里城のような大きな建造物の場合はなおさらである。その**ショック状態**のもとで反射的に「**沖縄のシンボル、心の支え**」といった言葉が出てもおかしくない。



再建をめぐる議論は、まず**私たちは何のために再建するのか**という意思を明確にし、確認することから始めなければならない。公的資金を、例えば児童の貧困問題解決のためではなく「**遺産**」の再建に費やすことの意義、すなわち、再建によって何が得られるのかを明確にしなければならない。



現実的な必要性として主張されるのは、観光業の持続的展開に資するものであり、雇用・県民所得に寄与するという**経済的メリット**の指摘が多いと思う。それと一体になって「**沖縄のシンボル**」論も主張されるかもしれない。しかし、歴史的視点すなわち**過去を振り返りその良否を考え**、これからの社会を築いていく上での教訓とする視点を欠如して、**経済・観光客数**だけに目を向けるのであれば、それは観光業の持続的展開につながらない。

観光業にとって、首里城再建が**長期持続的な観光の資源**となるためには、再建が、沖縄の人々自身が自分の歴史を学ぶきっかけとなり、また、**将来の沖縄社会を考える礎石の一つ**として位置づけられる必要がある。**県民一人一人が歴史を考える事業**として首里城再建が実行されることが必要である。

文字通りの「**県民主導・県民参加**」型の再建体制を作り、**じっくり時間をかけて**、首里城を「**私たちの城**」とすることを目指すべきであろう。

首里城再建に関しては、政府が2026年までの再建を目指しているが、屋嘉氏の提案にもあるようにじっくり時間をかける必要があるように思う。その際、**田名真之氏**(県立博物館・美術館館長)の発言が参考になる(沖縄タイムス:10.29より一部引用)。



今後首里城を中心としたエリアの**円覚寺**や**中城御殿**、**御茶屋御殿**の復元整備と首里城の**被災美術工芸品**の保全や収蔵、復元や修復、**伝統技術の継承人材の育成**などが検討されていくことになると思われる。

また、**高山朝光氏**の提案も一考に値するだろう(琉球新報:11.20より一部引用)。

聖域を有する首里城下の**第32軍司令部地下壕**は、**沖縄戦で多くの犠牲を住民に強い象徴的場所**である。その観点からもその地下壕に**平和の灯火**をかざすべきである。(中略) 首里城の再建とともに**第32軍司令部壕の整備保存・公開**を強く望むものである。**平和の象徴首里城と負の遺産第32軍司令部壕から世界平和を広く発信**したい。



私も、首里城が燃え、崩れ落ちる姿を目にした。多くの人たちによって再建された首里城が燃えているのに為す術もなく、茫然と見ていることしかできなかった。

メディアのインタビューで「**沖縄のシンボル、心の支え**」と答えた県民が多かったが、県民は首里城のどこに心の支えを見いだしたのかを知るためにも、私たちは琉球・沖縄の歴史をしっかりと学ぶことが必要だ。

今回、首里城再建について取り上げたが、生徒の皆さんも**皆さんなりの首里城再建論**に考えを巡らせて頂きたい。

沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎